

第3節 縄文時代の調査

1 概要

縄文時代の帰属と考えられる遺構は、土坑28基である。これらのうち、掘方の形態や埋土の特徴から落とし穴と推定できる土坑は、26基と多数を占める。帰属時期比定の主要な根拠となる土器等遺物は良好な状態での出土が無く全般に低調だが、遺構埋土中で検出した炭化物のうち、8例について放射性炭素年代測定を実施したところ、一部の例外を除き縄文時代に該当し、この点からも年代比定においては概ね首肯できるものとする。放射性炭素年代測定結果の詳細については、各遺構の報告文章中及び第4章第2節で述べる。

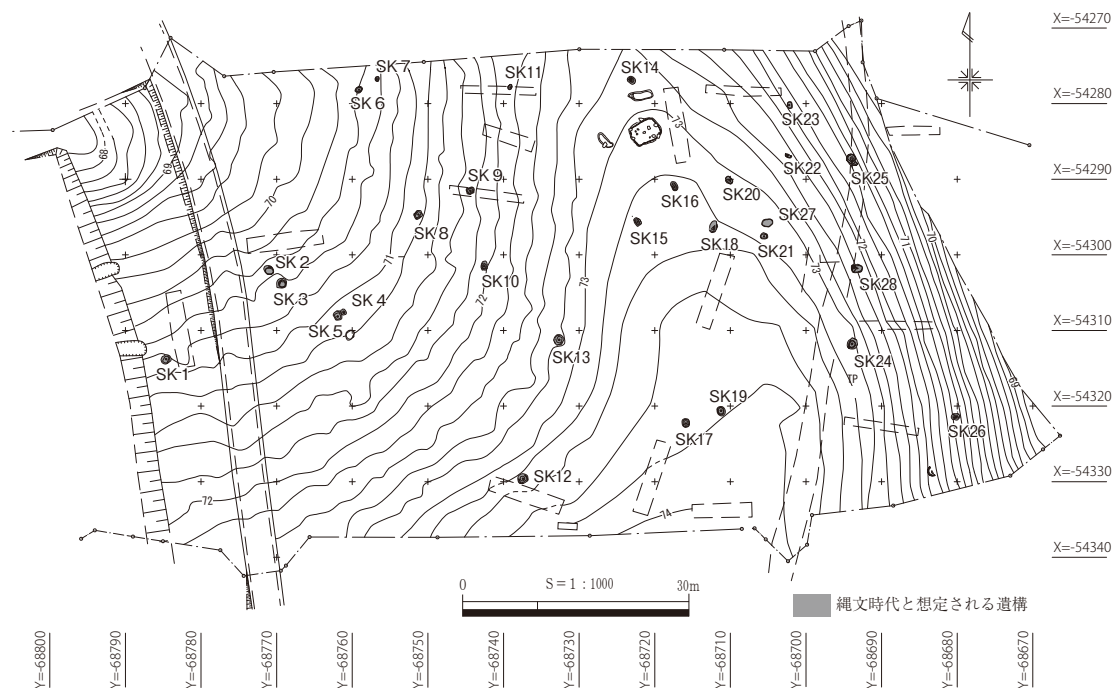
出土土器については、後晩期の粗製土器と想定される資料が数的には目立つが、早期の押型文土器をはじめ前期、中期の帰属が推定できる資料も散見され、出土量は少数ながら土器相はやや多様である。本章第6節で詳述する。

2 土坑

概要(第35図)

先述のように土坑28基のうち26基(SK1～26)が落とし穴と推定され、大多数を占める。他では土坑中に多数の礫が認められ、集石状を呈する土坑2基(SK27・28)がある。

旧名和町・中山町域(現行では大山町)の大山北麓地域における近年の調査において、落とし穴の調査事例は増加の一途を辿り、当該地域は県内において落とし穴が稠密な地域であることが明らかとなっている(中四国縄文研究会2013)。本遺跡はこうした傾向の一翼をなし、落とし穴の多数分布が認められる遺跡と言える。このように増加する資料をより体系的に理解することを目的とし、本報告では落とし穴に関する構造について整理を行った。なお、大山町(旧名和町)西坪中中畝遺跡においても、



第35図 縄文時代の遺構配置

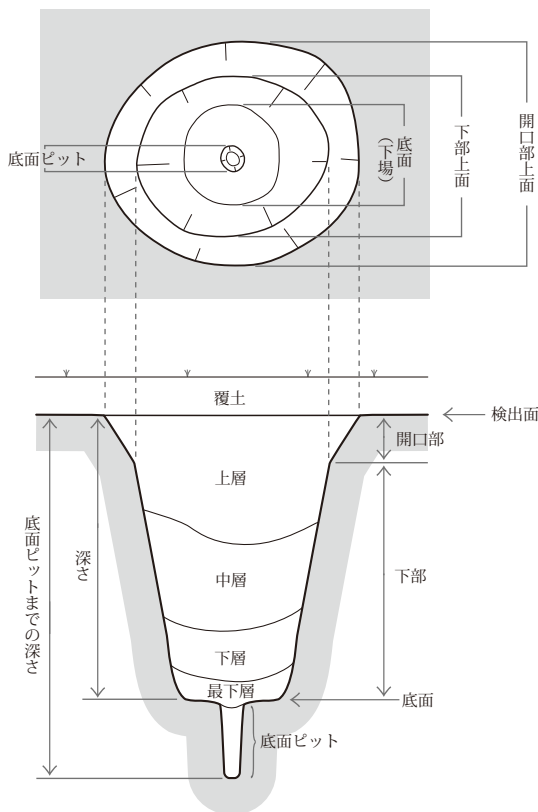
本遺跡と同様多数の落とし穴が検出されており、本遺跡例との比較検討も視野に入れ、落とし穴の構造について語句・名称を共有することとした(鳥取県埋蔵文化財センター2013)。以下、その詳細を述べる(第36図)。

落とし穴の構造 落とし穴掘方の断面に注目すると、掘方上部においてくびれ、漏斗状に開く形態を持つ事例が散見される。調査事例の増加に伴い、この形態は落とし穴の基本的な構造を考える上で重要な属性と想定するに至っている。大山北麓地域ではいわゆるクロボク土壌が発達しており、落とし穴のほとんどにはクロボク由来とみられる黒色及び黒褐色を呈する土が中心となり埋積する。そのため、調査地にクロボクが遺存している場合、埋土色調との類似からクロボクにおける検出作業は困難となり、クロボク下に堆積する火山性碎屑物層及びそれとの漸移層まで掘り下げて初めて遺構が認識できる事例が大半である。したがって、土壌化による流失、後世の耕作等による改変も加味すれば、報告された落とし穴の多くは掘方上部を失っていると考える。このような想定に立ち、掘方上部でくびれ、開く形態が確認できる事例は遺存状態の良好な落とし穴と考える。ここでは、くびれ部から上位の開く部分を「開口部」、それ以下を「下部」と呼称することとする。

落とし穴の平面形については、開口部と下部で異なる可能性を想定する必要がある。ただ、既往のとおり開口部の遺存事例が少ないこと、開口部上面においては土壌化による攪乱等により平面形の認識が難しい事例が多いことから、ここでは、落とし穴相互比較の手段として、最も遺存状況に左右されない掘方底面の平面形を重視して判断する。

落とし穴の各部名称 上記以外の落とし穴に関する各部について説明する。

- ・遺構上面：検出面における遺構の上面。掘削当時の地表面と同義ではない。
- ・底面：土坑掘方の底面。底面ピットはここから掘り込まれる。
 - ・埋土：遺構内の埋土。底面ピット埋土も含む。
 - ・覆土：検出面の直上層。埋土とは区別する。
 - ・埋土上層・中層・下層：遺構埋土を上下に概ね三分したもの。
 - ・埋土最下層：埋土下層のうち、底面直上に堆積したと判断される層。
- ・深さ：検出面から底面までの深さ。底面ピットは含まない。
- ・底面ピット：底面以下の杭痕跡と想定される小穴。断面で確認できる単位をもって1基とする。



第36図 落とし穴の部位名称

SK 1 (第37図、PL. 12・42)

C 6 グリッド、標高70.9mの平坦地に位置するが、本遺構のすぐ北側は小規模な谷地形を呈しており、緩斜面となる。クロボク(Ⅲ層)下のⅣ層において検出した。

平面形は短辺がやや丸みを帯びる隅丸長方形で、遺

構上面の東側が段掘り状となり、開口部が僅かに遺存する可能性がある。遺構上面における規模は、長軸1.28m、短軸1.24m、底面では長軸0.92m、短軸0.64mを測る。検出面からの深さは、最大で1.14mである。

埋土は全般に黒褐色を呈し、クロボク由来と考える。基盤層由来土をブロック状、粒状に含む。

底面のほぼ中央で底面ピットを1基検出した。平面形は円形で、径は0.20m、底面からの深さは0.38mである。

埋土上層(1層)において、土器片がまとまって出土した(第37図1)。1層中には炭化物も含まれており、人為的な関与を経た堆積の可能性が窺える。1は縄文土器の浅鉢である。底部は遺存していない。胴部のほぼ中央で緩く屈曲し、外反気味に外傾し立ち上がる器形を示す。内外面にはミガキが施される。晩期前葉頃の帰属と考えられる。

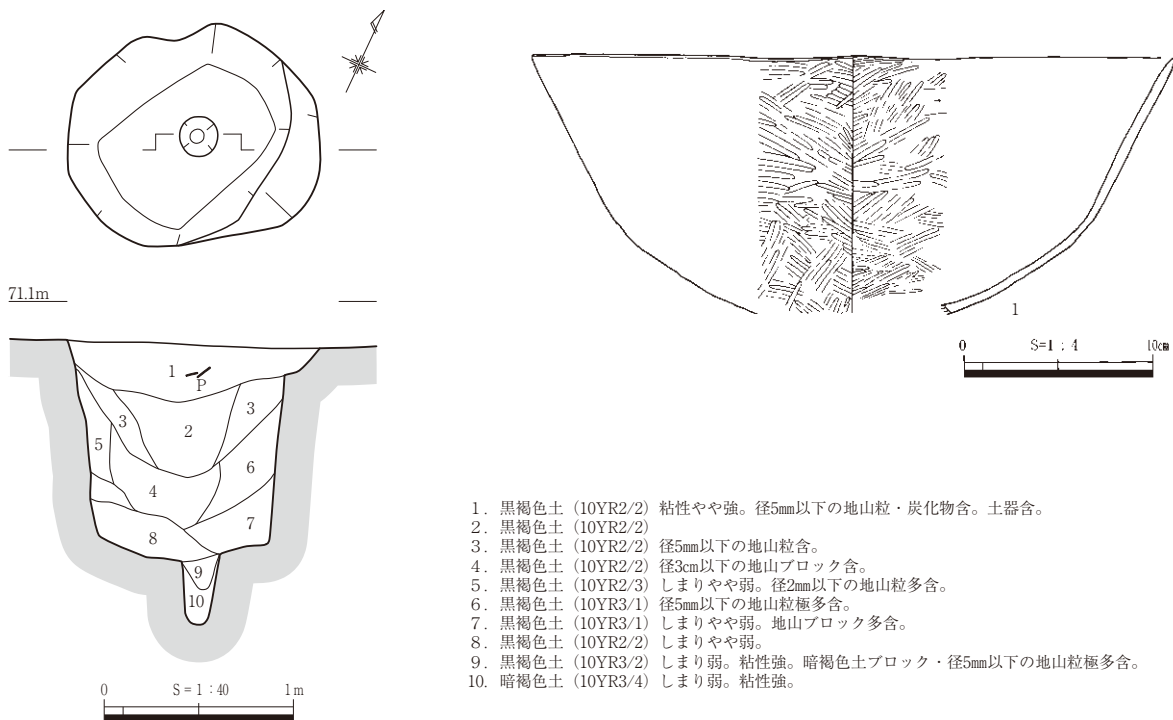
底面ピット埋土を採取し、抽出された炭化物を試料とし放射性炭素年代測定を実施したところ、較正年代で1414~1318calBCとの結果を得た。これは、縄文時代後期後葉から末葉頃に相当する。

埋土及び形態的な特徴、分析結果から、本遺構は縄文時代の落とし穴と考える。

SK 2 (第38図、PL.12)

D 5 グリッド、標高約70.7mの平坦地に位置する。ただ、北西側は小規模な谷地形で緩斜面となり、傾斜変換点に近い立地と言える。南東側1m余りの至近にSK 3が位置する。IV層における検出だが、風倒木に起因するとみられる堆積を一部掘り込んでいる。

平面形はやや歪な楕円形を呈する。北側の掘方が段掘り状となるが、攪乱による可能性もあり、埋土観察では判断できない。規模は、遺構上面で長軸1.40m、短軸1.12m、底面では長軸1.03m、短軸0.82mで、検出面からの深さは0.52mを測る。



第37図 SK 1 及び出土遺物

第3章 調査の成果

埋土の色調は黒褐色、暗褐色を主体とし、クロボク(Ⅲ層)由来と考える。全般に基盤層をなす火山性碎屑物由来土をブロック状、粒状に多く包含する。

遺物は出土していない。本遺構は、検出層位を考慮すれば掘削面はもっと上位にあることは明らかで、本来はもっと深い土坑であったと想定できる。底面ピットを有さないが、埋土の特徴や掘方の形態から縄文時代の落とし穴と考える。

SK 3 (第38図、PL.13)

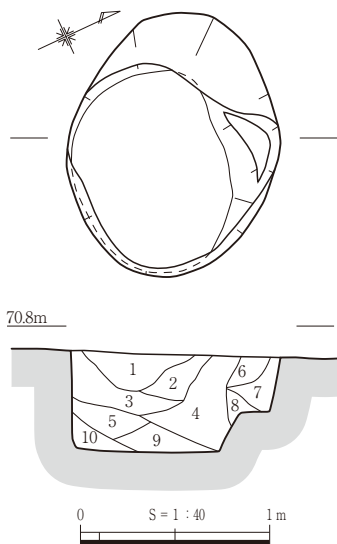
D 5・E 5グリッド、標高70.7mの平坦地に位置する。本遺構の北西至近にSK 2があり、同方向にある谷地形へ降る傾斜の変換点近くに立地する。Ⅳ層における検出で、風倒木に起因すると想定される堆積を一部掘り込む。

平面形はやや歪んだ円形である。掘方上部が全般に開き、開口部の可能性を持つが、樹木根による攪乱の影響も窺え、明瞭ではない。規模は、遺構上面で短軸1.32m、長軸1.50m、底面で径0.80m程度となる。検出面からの深さは、最大で0.72mである。

埋土色調は黒褐色を主体とし、クロボク(Ⅲ層)由来と考える。基盤層由来土をブロック状・粒状に多く包含する傾向が強い。

埋土上層(3層)において、土器片が1点出土した(第39図2)。内外面粗いナデが施されており、小片で不明瞭だが後晩期帰属の粗製土器と考える。

本遺構はSK 2と同様に検出層位を考慮すると、本来の掘り込み面は上と考えられ、より深い土坑と想定できる。底面ピットを持たないが、埋土の特徴や掘方の形態から、縄文時代の落とし穴と考える。

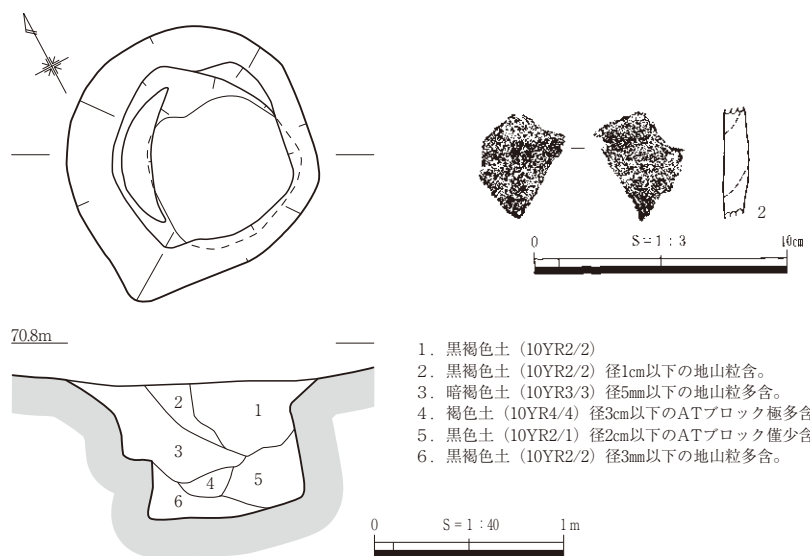


1. 黒褐色土 (10YR2/2) 径3mm以下の地山粒含。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 径3mm以下の地山粒多含。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 径5mm以下の地山粒含。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 径2cm以下のATブロック極多含。径3mm以下の炭化物含。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 径5mm以下の地山粒多含。
7. 黒色土 (10YR2/1)
8. 褐色土 (10YR4/4) 径3cm以下のATブロック多含。
9. 暗褐色土 (10YR3/3) 径1cm以下のAT粒多含 (4層より少)。
10. 黒色土 (10YR2/1)

第38図 SK 2

SK 4・5 (第40図、PL.13・14・42)

E 5グリッド、標高71.1mの平坦地に位置する。漸移層であるⅣ層検出の遺構で、2基の土坑(SK 4・5)の掘方が僅かに重複した状態で検出された。土層断面及び平面での観察により、SK



1. 黒褐色土 (10YR2/2)
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下の地山粒含。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 径5mm以下の地山粒多含。
4. 褐色土 (10YR4/4) 径3cm以下のATブロック極多含。
5. 黒色土 (10YR2/1) 径2cm以下のATブロック僅少含。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 径3mm以下の地山粒多含。

第39図 SK 3 及び出土遺物

5がSK4を掘り込むと判断した。

SK4 平面形は円形である。開口部は認められない。規模は遺構上面で長軸0.80m、短軸0.66m、底面で径0.32~0.34mを測り、小振りでとりわけ底面規模が小さく、断面をみると底面側が先細り気味となり特徴的である。検出面からの深さは、0.99mを測る。当初は、小型の落とし穴と認識していたが、開口部を失っていると想定した場合、土坑全体の規模が小さいとは限らず、正確には下部の平面規模が小さいと現状では指摘できる。

埋土色調は黒色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。

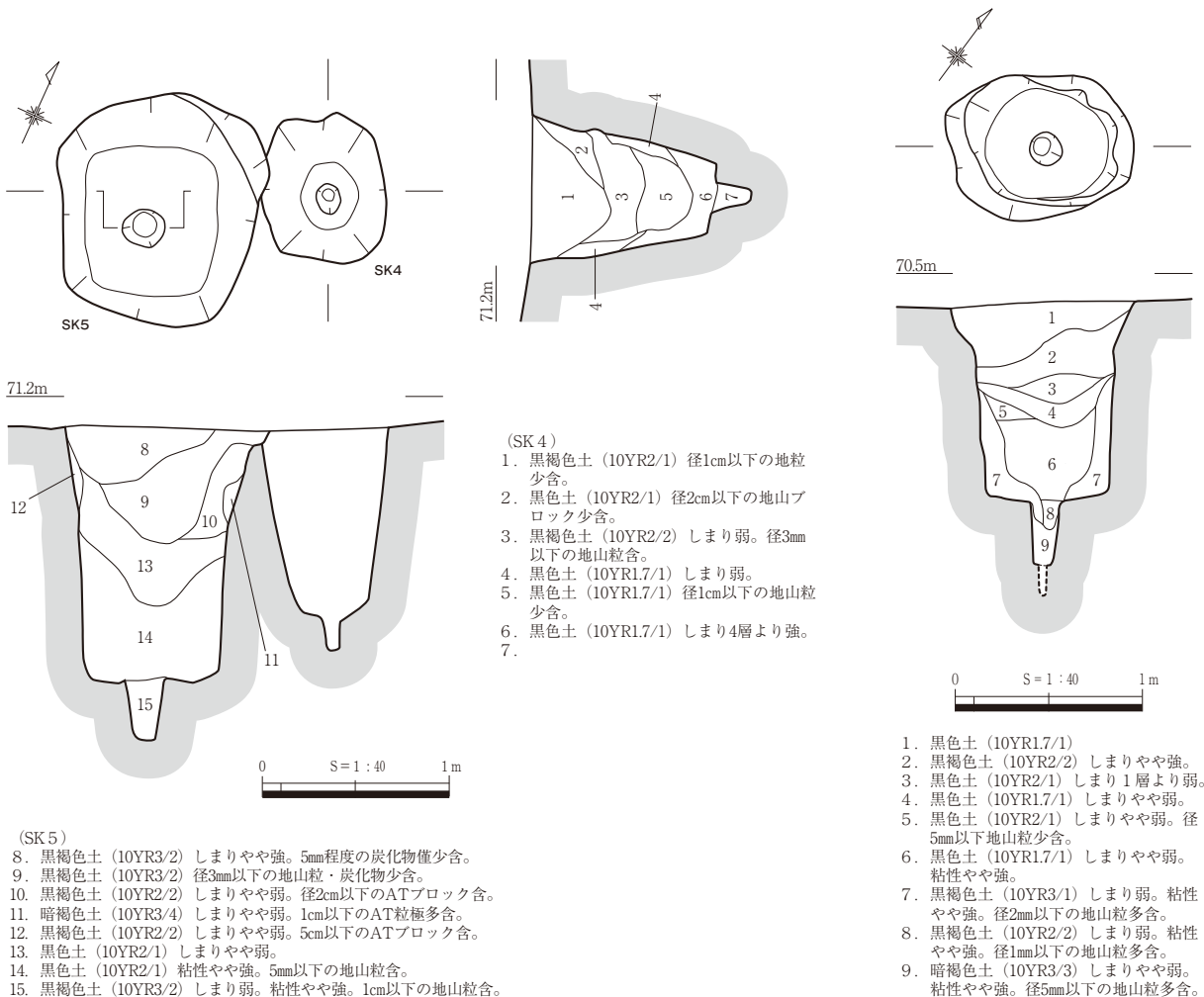
底面中央において、底面ピットを1基確認した。平面形は楕円形で、長軸0.16m、短軸0.12m、底面からの深さは0.20mである。明瞭な杭痕跡は認められない。

出土遺物は無いが、底面ピット埋土(7層)から抽出した炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定を実施したところ、較正年代で1616~1532calBC、縄文時代後期後葉頃に相当する結果を得ている。

本遺構は埋土、形態的特徴、分析結果から縄文時代の落とし穴と考える。

SK5 平面形は隅丸方形形状を呈する。明瞭な開口部は認められない。規模は、遺構上面で長軸1.24m、短軸1.13m、底面では長軸0.80m、短軸0.72m、検出面からの深さは1.36mを測る。本遺跡検出の落とし穴の平面規模としては大型の範疇に属する。

埋土色調は黒褐色、黒色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。



第3章 調査の成果

底面ピットは、土坑底面ほぼ中央に1基確認した。平面形は概ね円形で、径0.20~0.22m、土坑底面からの深さは0.34mである。明瞭な杭痕跡は確認していない。

本遺構から遺物は出土していない。底面ピット埋土(15層)より抽出できた炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、較正年代で1505~1450calBCとの結果を得ている。これは縄文時代後期後葉から末葉頃に相当する。重複関係にある2基の土坑の年代測定を実施したが、一応齟齬のない結果となった。

本遺構は埋土及び形態的特徴、分析結果から、縄文時代の落とし穴と考える。

SK 6 (第41図、PL.15)

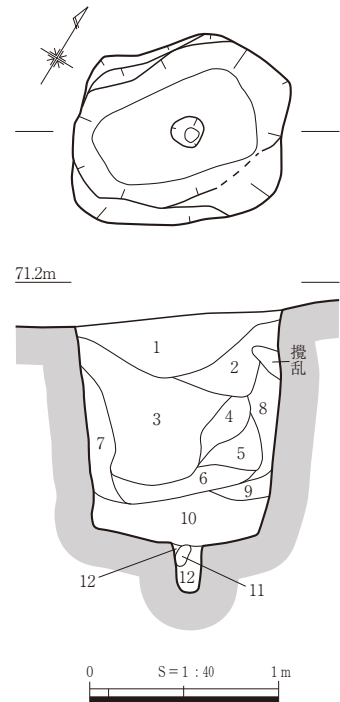
F 2 グリッド、標高70.4mの平坦地に位置する。IV層検出の遺構で、2m北東側至近にはSK 7がある。

平面形は円形である。掘方上部が開き気味となっており、開口部が一部遺存すると考える。規模は遺構上面で長軸1.02m、短軸0.78m、底面で長軸0.65m、短軸0.58mを測る。検出面からの深さは1.06mで、下部の深さは最大で0.82mである。

埋土色調は黒色、黒褐色が中心となり、クロボク(Ⅲ層)由来の堆積と考えられる。

底面ピットは、土坑底面のほぼ中央に1基確認した。平面形は円形で、規模は径0.18m、土坑底面からの深さは0.35mである。明瞭な杭痕跡は確認できなかった。

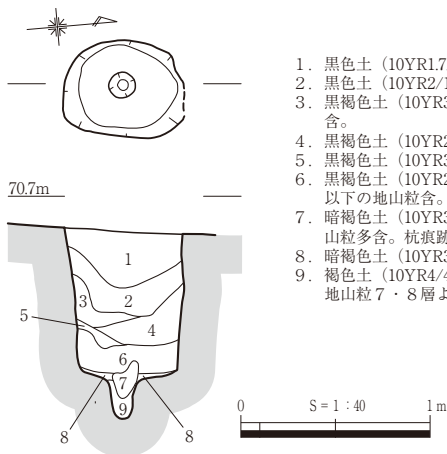
本遺構から遺物は出土せず、年代比定の材料に欠けるが、形態や埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。



1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下の地山粒僅少含。
3. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。粘性やや強。径1cm以下の地山粒僅少含。
4. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強。径2cm以下の地山ブロック多含。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 径2cm以下の地山ブロック多含。
6. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱。
7. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱。径2mm以下の地山粒多含。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。粘性やや強。径2mm以下の地山粒多含。
10. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。粘性やや強。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱。粘性やや強。
12. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱。径5mm以下の地山粒極多含。

SK 7 (第42図、PL.15・16)

F 2 グリッド、標高70.7mの平坦地に位置する。検出した層位はⅦ層である。本遺構周辺はソフトロームと考えられるⅤ層の堆積が顕著ではなく、クロボク(Ⅲ層)下にはAT及びその二次堆積層であるⅦ層が露出する傾向にある。



1. 黒色土 (10YR17/1) 径5mm以下の地山粒僅少含。
2. 黒色土 (10YR2/1)
3. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強。径3mm以下の地山粒僅少含。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径3mm以下の地山粒多含。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強。地山ブロック多含。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり4層より弱。粘性やや強。径5mm以下の地山粒多含。
7. 暗褐色土 (10YR3/2) しまり弱。粘性やや弱。径2mm以下の地山粒多含。杭痕跡か。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強。径2mm以下の地山粒多含。
9. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱。粘性やや強。径2mm以下の地山粒7・8層より多含。

第42図 SK 7

第43図 SK 8

平面形は円形である。開口部は認められない。規模は遺構上面で長軸0.65m、短軸0.51m、底面では長軸0.52m、短軸0.43mと、小振りである。検出面からの深さは0.78mを測る。SK4の項でも触れたが、開口部を失っていると考えられるため、土坑全体として規模が小さいかどうかの評価は現状では控えておきたい。

埋土の色調は黒色、黒褐色が主体で、クロボク由来土と考えられる。

底面ピットは、土坑底面ほぼ中央に1基確認した。平面形は円形で、径0.14m程度、土坑底面からの深さは0.21mである。明瞭ではないが、杭痕跡の可能性のある堆積(7層)を確認した。

遺物は出土していない。本遺構は、形態や埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK8 (第43図、PL.16)

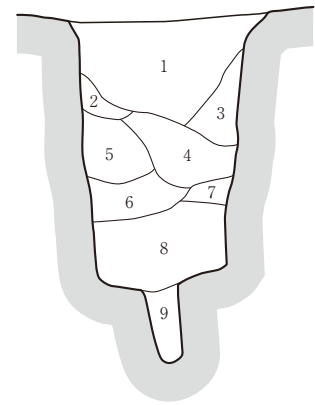
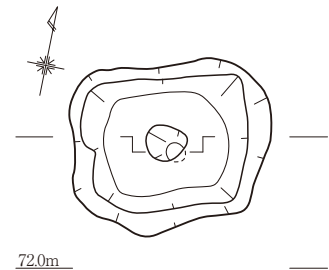
F4グリッド、標高71.1mの平坦地に位置する。検出した層位はⅢ層下漸移層のⅣ層である。

平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、長辺側の掘方上部は段状を呈し、開口部の可能性があるが明瞭ではない。規模は遺構上面で1.29m、短軸0.95m、底面で長軸0.85m、短軸0.47mである。検出面からの深さは、1.21mを測る。

埋土の色調は、黒褐色、黒色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。

底面ピットは、土坑底面ほぼ中央に1基確認した。平面形はやや歪な円形で、径は0.16m程度である。明瞭な杭痕跡は認められず、埋土はしまりが弱く暗褐色を呈する。

遺物は出土していないが、本遺構は形態や埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 径5mm以下の地山粒僅少含。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱。粘性やや強。径3cm以下の地山ブロック多含。
3. 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒含。
4. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径5mm以下の地山粒含。
5. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。
6. 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや弱。粘性やや強。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径3cm以下の地山ブロック多含。
8. 黒色土 (10YR1.7/1) しまりやや弱。粘性やや強。径5mm以下の地山粒含。
9. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱。粘性やや強。径5mm以下の地山粒多含。

SK9 (第44図、PL.17)

G4グリッド、標高71.8mの平坦地に位置する。平成21年度確認調査においてTr.14で検出されたSK1に該当する(鳥取県埋蔵文化財センター2011)。Ⅳ層において検出した。

平面形は二辺が丸みをもつ隅丸方形である。検出した掘方上部が段を持ちやや開き気味になることから、開口部が僅かに遺存するものとみられる。規模は、遺構上面で長軸1.08m、短軸0.88m、底面では長軸0.67m、短軸0.52mを測る。検出面からの深さは、最大で1.42mである。下部の深さは1.32m程度となる。底面は平坦ではなく、中央に向けてやや傾斜し深くなる特徴をもつ。

埋土の色調は主に黒色、黒褐色を呈し、クロボク(Ⅲ層)由来土と考えられる。

底面中央に底面ピットを1基検出した。平面形はやや歪な円形で、径0.21m、底面からの深さは最大で0.42mを測る。明瞭な杭痕跡は確認できない。

遺物は出土していないが、本遺構は形態や埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

第44図 SK9

SK10(第45図、PL.17・18)

G 5グリッド、標高72.1mの平坦地に位置する。クロボク(Ⅲ層)下のⅣ層で検出した遺構である。

平面形は楕円形である。開口部は遺存していない。掘方がやや段状を呈するのは下部においてであり、当該箇所を埋土堆積に重ねると再掘削の可能性も想起されるが、明確ではない。規模は、遺構上面で長軸1.19m、短軸0.82m、底面で長軸0.51m、短軸0.39m、検出面からの深さは1.38mである。遺構上面と底面との規模差が比較的大きく、掘方の断面形は底面に向かって先細り気味となる。

埋土の色調は黒色、黒褐色が主体となっており、Ⅲ層に由来する堆積と考える。基盤層である火山灰碎屑物層由来土をブロック状、粒状に多く包含する層も見受けられる。埋土最下層の22層は、始良丹沢火山灰由来土を多く含んでおり、人為的な所作を経た可能性が考えられる堆積である。

底面ピットは1基で、概ね底面中央に穿たれる。平面形は楕円形で、規模は長軸0.19m、短軸0.13m、底面からの深さは0.31mである。底面ピット埋土は全般にしまりが弱い堆積だが、色調の違いから杭痕跡の可能性を持つ堆積(23層)を確認した。杭痕跡とした場合、杭の径は7~9cm程度に復元できる。

遺物は出土していないが、本遺構は形態や埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK11(第46図、PL.18)

H 2グリッド、標高72.1mの平坦地に位置する。検出層位は始良丹沢火山灰(AT)由来とみられるⅦ層である。本遺構周辺はSK 7と同様にⅤ層の堆積が顕著ではない。

平面形はやや長めだが円形である。明瞭な開口部は認められない。規模は、遺構上面で長軸0.74m、短軸0.52m、底面で長軸0.55m、短軸0.48mを測る。遺存部分だけをみると、規模は小さい範疇に属するが、開口部を失っているため即断はできない。現状では掘方形態の違いとして認識している。

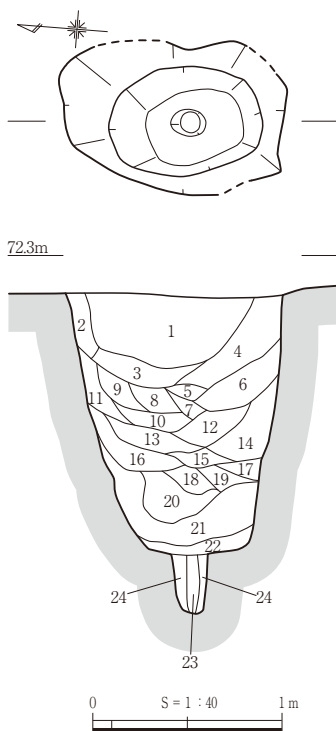
埋土の色調は黒褐色を呈し、Ⅲ層由来と考えられる。

底面ピットは1基を確認した。平面形は円形で、規模は径0.12m、底面からの深さは0.32mである。明瞭な杭痕跡は認められない。

遺物は出土していないが、本遺構は形態や埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

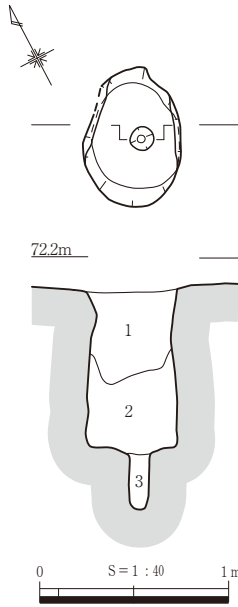
SK12(第47図、PL.18・19)

H 7・8グリッド、標高73.4mの平坦地に位置する。調査地やや東寄りを北方へ延びる丘陵尾根部と、調査区北



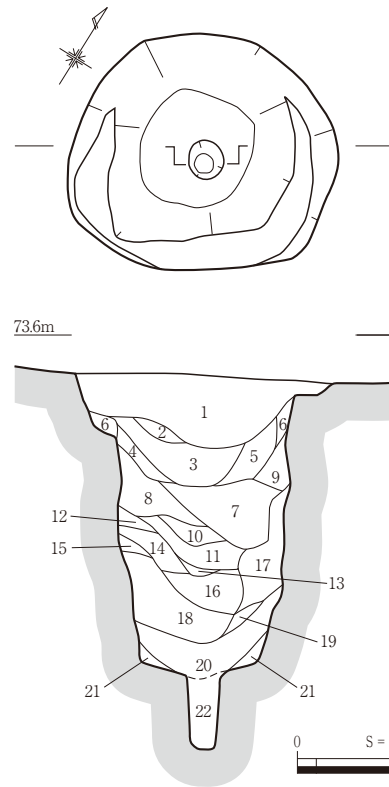
1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱。径1cm以下の地山粒少含。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 径5mm以下の地山粒極多含。
3. 黒色土 (10YR1.7/1) 径5mm以下の地山粒少含。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
5. 黒色土 (10YR2/2) 径5mm以下の地山粒含。
6. 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや弱。径5mm以下の地山粒多含。
7. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 径3mm以下の地山粒多含。
9. 黒色土 (10YR2/1) 径2mm以下の地山粒少含。
10. 黒色土 (10YR1.7/1) 径1cm以下の地山粒含。
11. 黒褐色土 (10YR2/3) 径5mm以下の地山粒極多含。
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 径5mm以下の極多含。一部に径5cm程度のATブロック含。
13. 黒色土 (10YR2/1) 径5mm以下の地山粒含。
14. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱。粘性強。径3mm以下の極多含。
15. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱。粘性強。径5cm程度の地山粒含。
16. 黒色土 (10YR1.7/1) 径1cm以下の地山粒含。
17. 黒褐色土 (10YR2/2)
18. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり弱。粘性強。径1cm以下の地山粒極多含。
19. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒含。
20. 黒褐色土 (10YR3/1)
21. 黒褐色土 (10YR2/2)
22. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性やや強。AT粒多含。
23. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱。粘性やや強。径2mm以下の地山粒多含。
24. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり23層より弱。根攪乱の影響が。粘性強。径2mm以下の地山粒多含。

第45図 SK10



1. 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや弱。径5mm以下の地山粒少含。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径5mm以下の地山粒少含 (1層より多い)。
3. 黒褐色土 (10YR3/3) しまり弱。粘性やや強。径1cm以下の地山粒多含。

第46図 SK11



1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強。粘性弱。炭化物含。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物集中、炭化物は1層より大。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物・径2mm以下の地山粒少含。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物・径1cm以下の地山粒含。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) 径1cm以下の地山粒多含。
7. 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや弱。炭化物・径5mm以下の地山粒少含。
8. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。炭化物・径5mm以下の地山粒含。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下のAT粒多含。5cm程度のATブロック含。
10. 黒褐色土 (10YR2/2)
11. 黒色土 (10YR2/1) 径2mm以下の地山粒含。
12. 黒褐色土 (10YR2/3) 径2mm以下の地山粒多含。
13. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強。粘性強。
14. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下の地山粒含。
15. 黒褐色土 (10YR3/2) 径2cm以下の地山ブロック多含。
16. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性やや強。
17. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱。径3mm以下の地山粒多含。
18. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱。
19. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性強。
20. 黒色土 (10YR2/1) しまり・粘性やや強。
21. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強。径2cm以下Tブロック多含。
22. 黒色土 (10YR2/1) 20層と色調類似するが、しまり弱。

第47図 SK12

西側の小規模な谷地形との変換点付近に該当する。Ⅲ層下のⅣ層検出の遺構である。

平面形は円形である。一部不明瞭ではあるが、遺存する掘方上位には段状を呈する箇所が認められ、僅かながら開口部が遺存すると考える。規模は、遺構上面で長軸1.44m、短軸1.25m、底面で径0.62m、検出面からの深さは1.59m、下部の深さは最大で1.45mである。

主体となる埋土の色調は黒褐色、黒色を示し、Ⅲ層由来と考えられる。

底面ピットは、底面やや南東寄りに1基を確認した。平面形は円形で、規模は径0.19~0.20m、底面からの深さは0.39mである。明瞭な杭痕跡は認められない。埋土(22層)の色調は直上の20層との差異が少ないが、ややしまりが弱い。

本遺構から遺物は出土していないが、底面ピット埋土(22層)より抽出できた炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定を実施した結果、較正年代で1041~939calBCとの数値を得た。これは縄文時代晩期前葉から中葉頃に相当する。

遺物は出土していないが、掘方形態及び埋土の特徴、分析結果から、本遺構は縄文時代の落とし穴と考える。

SK13(第48図、PL.19)

H6グリッド、標高72.8mの平坦地に位置する。SK12と同様、調査地内を北へ延びる尾根部と北西側の谷部との傾斜変換点付近である。本遺構周辺はⅢ層下のⅤ層の堆積が顕著でなく、AT由来のⅦ層で検出した。

平面形は各辺やや丸みをもつが、比較的整った長方形である。遺構北東側は不明瞭だが、現存する

第3章 調査の成果

掘方上部は段掘り状を呈し、開口部が僅かに遺存すると考える。遺構上面の平面形態は円形状を呈し、規模は径1.38m程度、底面では長軸0.81m、短軸0.65mと、遺構上面と底面の規模差は比較的大きい。掘方の断面形態をみると、下部は底面へ向けてやや先細る傾向にある。検出面からの深さは1.26m、下部の深さは明瞭でないが、概ね0.85m程度である。

埋土色調は、黒褐色、黒色が主体となり、Ⅲ層由来と考えられる。

底面ピットは1基、底面の中央に穿たれる。ピットの平面形は円形、規模は径0.22m、底面からの深さは、最大で0.38mである。明瞭な杭痕跡は認められなかった。

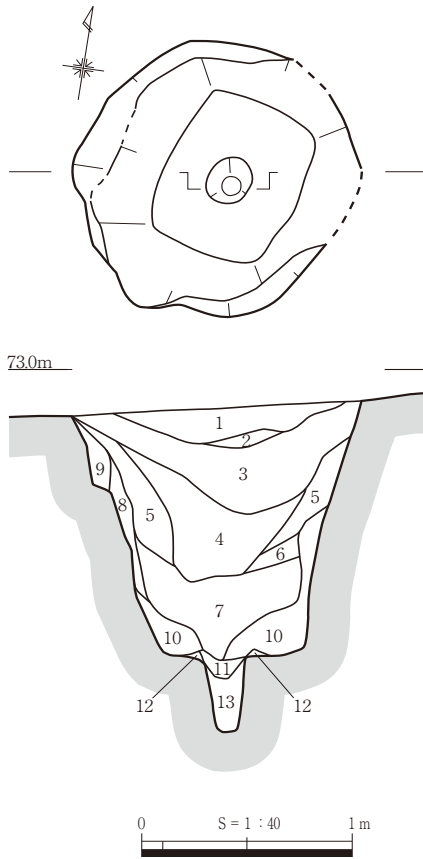
本遺構から遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から、縄文時代の落とし穴と考える。

SK14(第49図、PL.20)

I 2グリッド、標高72.9mの平坦地、丘陵尾根部のほぼ中央に位置する土坑である。本遺構のすぐ南側には、弥生時代後期帰属の竪穴住居跡(SI1)等が所在する。検出層位はⅦ層である。SK11等と同様に調査地北側一帯、すなわち尾根部及び北西側の谷地形へと緩やかに降る範囲は概してⅤ層(ソフトローム相当層)の堆積が顕著ではない。

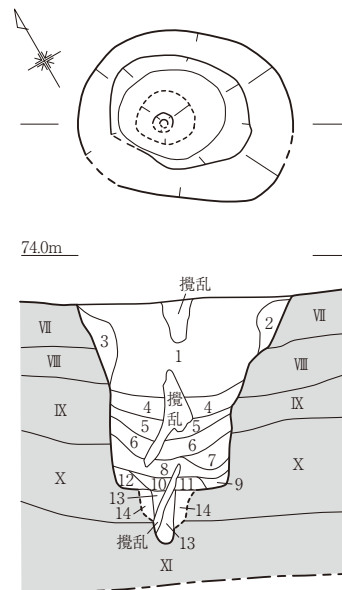
平面形は楕円形である。掘方上部には比較的明瞭にくびれが見て取れ、開口部の遺存が確認できる。遺構上面と底面の平面形に大きな差はない。底面はほぼ平坦、下部との境が明瞭で、掘方はしっかりとしている。規模は、遺構上面で長軸1.15m、短軸0.88m、下部上面で長軸0.75m、短軸0.59m、底面で長軸0.56m、短軸0.47mである。検出面からの深さは1.01m、下部の深さは最大で0.68mを測る。

埋土は、全般に黒色、黒褐色を主体としⅢ層由来と考えられ



1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強。炭化物少含。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強。ATブロック多含。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱。径1cm以下のAT粒僅少含。
4. 黒色土 (10YR2/1) 径2cm以下のATブロック僅少含。
5. 黒色土 (10YR1.7/1) 径5mm以下の地山粒含。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。
7. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
9. 黒褐色土 (10YR3/2) 径7cm程度のATブロック含。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径2mm以下の地山粒含。
11. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱。粘性やや強。径5mm以下の地山粒多含。
12. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性強。径1cm以下のAT粒多含。
13. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり11層より弱。径5mm以下の地山粒多含。

第48図 SK13



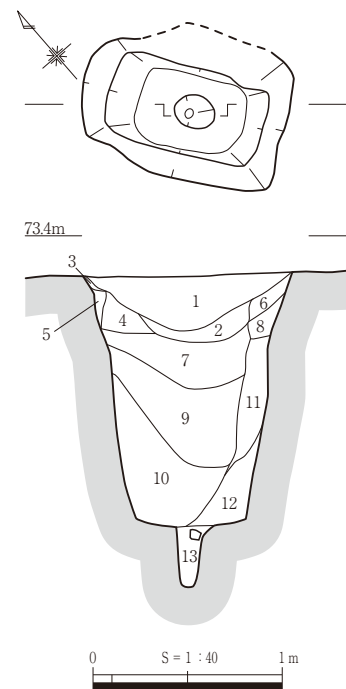
1. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒含。
2. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒少含。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。
4. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり・粘性やや強。径1cm以下の地山粒極多含。径1cm以下の黒褐色土粒少含。
5. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒含。
6. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒極多含。
8. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒多含。
9. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱。径1cm以下の地山粒多含。
10. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒多含。
11. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒僅少含。
12. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒極多含。
13. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱。粘性やや弱。径1cm以下の地山粒多含。径1cm以下の黒褐色土粒多含。
14. 黄褐色土 (10YR8/6) しまり強。粘性やや弱。地山由来土主体。径1cm以下の黒褐色土粒僅少含。

第49図 SK14

る。ただ、4層～12層にかけての埋土中層・下層では、基盤層由来土が粒状・ブロック状に多く含まれる層(4・7・8層)と、基盤層由来土の包含量が少ない層(5・6層)とが互層状に堆積しており、特徴的である。最下層にも多くの基盤層由来土が粒状に入る(9・10・12層)。本遺構では、底面ピットを1基検出しており、埋土中層・下層との関わりを詳細に検討するため、埋土を半截で掘り下げた側を箱状に大きく掘削(以下、「箱掘り」と呼称)し、土層断面観察を行った(PL.20)。しかしながら、遺構上面から底面ピットにかけ、掘方ほぼ中央を樹木根が延び攪乱を受けていたこともあり、杭痕跡を明確に把握することはできなかった。互層状の堆積は、杭支持のため人為に施された可能性もあるが、一連の堆積は最下層から中層にまで及び、杭支持とするには深すぎると思われる。他の落とし穴においても下層から最下層にかけてこのように互層状となる事例が散見される。現状では判然としないうが、壁面崩落、周辺からの流入といった自然な埋没過程を想定しておきたい。

底面ピットの平面形は円形で、径は0.11m程度、底面からの深さは0.29mである。埋土(13層)は暗褐色を呈するが、詳細な断面観察の結果、13層の周囲に掘り込みと思しき堆積(14層)を確認した。14層は、至近の基盤層を主体とし酷似するが、僅かに黒褐色土を粒状に包含し、断面では辛うじて認識できるが平面では明確に把握できなかったため、図では破線で表現している。14層の存在から、杭設置箇所に杭材よりも大きな規模の穴を掘り、杭材を据え、埋め戻し固定したことが想定され、杭材を設置する手法の一端を示すものの可能性がある。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。



SK15(第50図、PL.21)

I 4グリッド、標高73.2mの平坦地、丘陵尾根部に位置する。検出層位はⅦ層である。調査地北半の尾根部はV層の堆積があまりみられない。

平面形は隅丸長方形である。掘方の断面をみると上位に若干くびれが確認でき、開口部が一部遺存すると考える。底面の平面形は各辺丸みを持ち楕円に近い形状だが、下部上面の各辺は直線的で、長方形を意識した可能性が高いため、ここでは下部の形態を重視して判断した。規模は、遺構上面で長軸1.10m、短軸0.75m、下部上面では長軸0.84m、短軸0.47m、底面で長軸0.57m、短軸0.3mを測る。検出面からの深さは1.33m、下部の深さは最大で0.95mである。

埋土の色調は黒色、黒褐色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。

底面ピットは、底面ほぼ中央に1基を確認した。平面形は楕円形で、長軸0.22m、短軸0.17m、底面からの深さは0.32mである。埋土中には5cm大程度の小礫が数点含まれ、これらの小礫は杭支

1. 黒色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒少含。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。
3. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
4. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒多含。
5. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒多含。
6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒含。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒少含。
8. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強。径1cm以下の地山粒多含。径1～5cm程度の地山ブロック多含。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下の地山粒僅少含。
10. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒含。
11. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒少含。径1～3cm程度の地山ブロック少含。
12. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒多含。径1～2cm地山ブロック多含。
13. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱。底面レベルに礫を含。

第50図 SK15

第3章 調査の成果

持に用いられた可能性がある。明瞭な杭痕跡は認められない。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK16(第51図、PL.21・22)

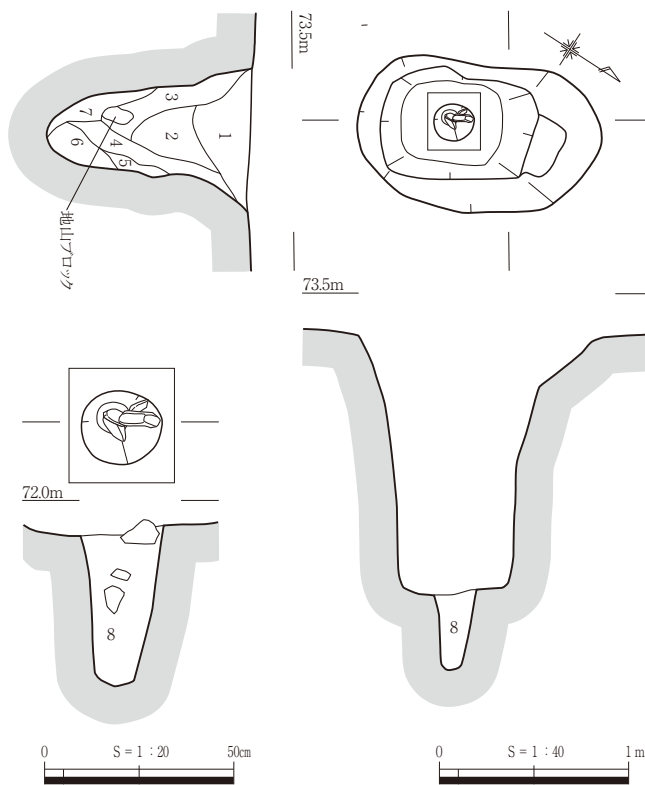
J 4グリッド、標高73.3mの平坦地、丘陵尾根部ほぼ中央に位置する。検出層位はⅦ層である。

平面形は、隅丸長方形である。掘方上位は段掘り状となり、開口部が残存する。底面においては楕円形にも近いが、遺存する下部上面の長辺が直線を指向することから、長方形を意識していると判断した。規模は、遺構上面で長軸1.29m、短軸0.81m、下部上面で長軸0.83m、短軸0.53m、底面で長軸0.53m、短軸0.43mを測る。検出面からの深さは1.39m、下部の深さは最大で1.09mである。

埋土色調は黒色を主体とし、Ⅲ層由来の堆積と考える。

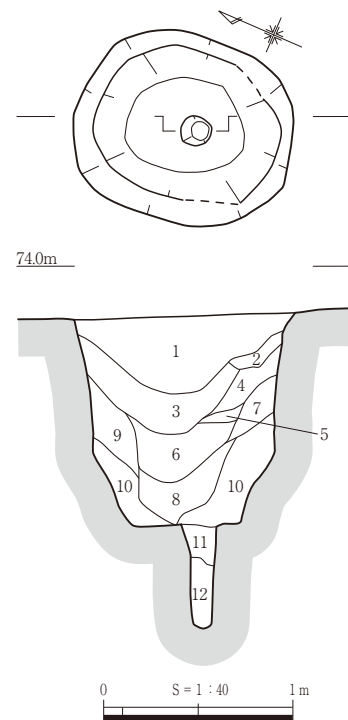
底面ピットは、底面ほぼ中央に1基である。平面形は円形で、径は0.20~0.22m、底面からの深さは0.41mである。埋土は粒状の基盤層由来土を多く包含し、色調は褐色系を呈する。埋土中には5~10cm大の小礫が4、5点含まれ、杭支持に使用したものと想定する。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱。径5mm以下の地山粒多含。
2. 黒色土 (10YR1.7/1)
3. 黒色土 (10YR2/1) 風化した地山粒多含。
4. 黒色土 (10YR2/1) 径2cm以下地山ブロック多含。
5. 黒色土 (10YR1.7/1) 径1cm以下の地山粒少含。
6. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや強。径5cm以下のATブロック極多含。
7. 黒色土 (10YR1.7/1)
8. 褐色土 (10YR4/4) 径3mm以下の礫含。径10cm以下の礫含(裏込か)。

第51図 SK16



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下のAT粒・炭化物少含。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱。微細な地山粒極多含。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 径5mm以下のAT粒・炭化物含。
4. 黒色土 (10YR2/1)
5. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり・粘性強。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下のAT粒僅少含。
7. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径1cm以下のAT粒多含。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱。粘性やや強。
9. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径1cm以下のAT粒多含。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径5mm以下のAT粒僅少含。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱。径5mm以下の地山粒極多含。
12. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱。粘性強。径5mm以下の地山粒極多含。

第52図 SK17

SK17(第52図、PL.22)

J 7グリッド、標高73.7mの平坦地、丘陵尾根部に位置する。本遺構から北東約5mの地点にSK19が所在する。Ⅶ層において検出した遺構である。

平面形は、楕円形である。明瞭な開口部は遺存していない。掘方断面をみると下部において稜が巡り、そこから底面にかけてすぼまるような形態を採る。規模は、遺構上面で長軸1.17m、短軸1.03m、底面では長軸0.64m、短軸0.51mを測る。検出面からの深さは、1.11mである。

埋土の色調は黒褐色、黒色を主体とし、Ⅲ層由来の堆積と考える。

底面ピットは1基、底面やや南寄りで検出した。平面形は円形で、規模は径0.16m、底面からの深さは0.54mである。杭痕跡については、判然としない。

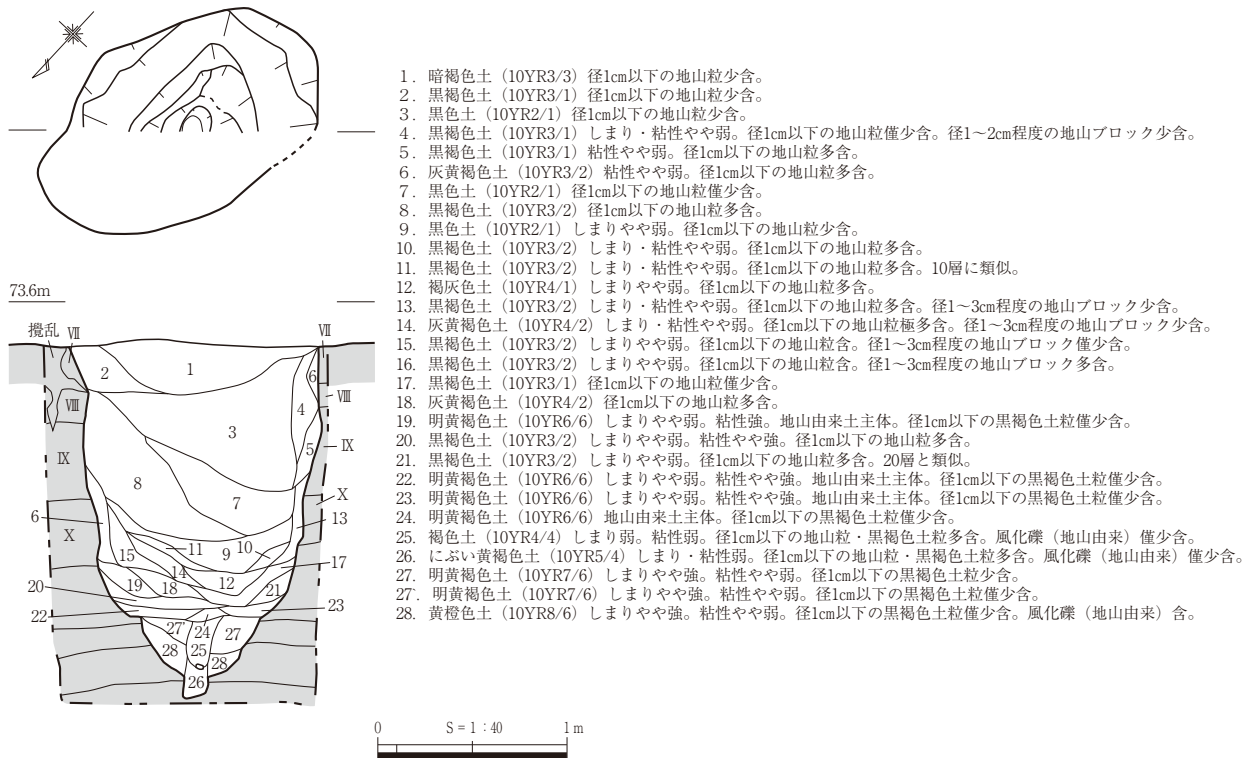
本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK18(第53図、PL.23)

J 4グリッド、標高73.4mの平坦地、丘陵尾根部に位置する。検出した層位はⅦ層である。

平面形は、箱掘りを行ったため不明となってしまったが、遺存部分から推測すると隅丸方形ないし隅丸長方形と考える。掘方断面をみると上位で段掘り状となり、僅かに開口部が遺存する可能性があるが明確ではない。規模は、遺構上面で長軸1.61m、短軸1.03m、底面は不明である。検出面からの深さは1.47mである。

埋土色調は、黒褐色、黒色を主体とし、クロボクであるⅢ層由来と考える。上から中層は概ねⅢ層由来土主体の堆積であるが、下層から最下層にかけては基盤層由来土をブロック状・粒状に多く包含し、主体となる堆積が目立つようになり、Ⅲ層由来土が主体となる層と比較的細かい単位で互層状となっている箇所も認められる。これら一連の堆積(9~24層)を断面で見ると、中央が下方に凹むレン



第53図 SK18

第3章 調査の成果

ズ状を呈しており、自然埋没を示唆するものと考ええる。

底面ピットは1基確認した。底面ほぼ中央に位置するとみられる。本遺構で箱掘りを行った目的は、埋土堆積の詳細な観察に加え、底面ピットに施されている杭痕跡の有無及びその本数、方向といったあり方の検討である。断ち割った土層断面を、平面に対し垂直方向へ少しずつスライスするように掘り進め、その都度断面を精査したが、本遺構では明瞭な杭痕跡は確認できなかった。ただ、詳細な断面観察を行った結果、底面ピット埋土である25・26層の周囲に掘り込みと思しき堆積を確認した(27・28層)。この堆積は至近の基盤層に酷似するが、粒状の黒褐色土を僅かに包含しており区別できたものである。土質は粘性が弱いものの締りは非常に強く、強固な杭設置には有効と考える。27・28層が本来の底面ピット掘方埋土とすれば、25・26層は杭痕跡と捉えることもできよう。その推測を採用した場合、杭の径は10cm程度となる。ピットの平面規模は箱掘りにより失われたため不明であるが、底面からの深さは0.41mを測る。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK19(第54図、PL.24)

J 7グリッド、標高73.8mの平坦地、丘陵尾根部に位置する。本遺構の南西約5mにSK17が所在する。漸移層であるIV層での検出であるが、V層の堆積は少なく、AT由来のVII層が認められる。

平面形は円形で、検出した掘方上位は段掘り状となるため、開口部が遺存すると判断した。規模は遺構上面で長軸1.28m、短軸1.09m、くびれ部分では径0.85~0.99m程度、底面では径0.69~0.80mである。検出面からの深さは1.29mで、下部の深さは最大で1.07mを測る。

埋土色調は黒褐色を主体とし、III層由来と考えられる。

底面ピットは底面ほぼ中央に1基確認した。平面形は円形で、規模は径0.23~0.25m、底面からの深さは0.38mを測る。埋土(11層)の色調は直上の8層に近似するが、基盤層由来土を粒状に多く包含する。明瞭な杭痕跡は確認されなかった。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK20(第55図、PL.24・25)

J 4グリッド、標高73.0mの平坦地、丘陵尾根部に位置する。J 4グリッド杭の直下で検出された。検出層位はVII層だが、掘方上位を中心に後世の攪乱坑に掘削されている。

平面形は楕円形である。開口部は遺存していない。規模は、遺構上面で長軸1.10m、短軸0.80m、底面では長軸0.98m、短軸0.57m、検出面からの深さは0.93mである。

埋土の色調は黒褐色を主体とし、III層由来と考える。

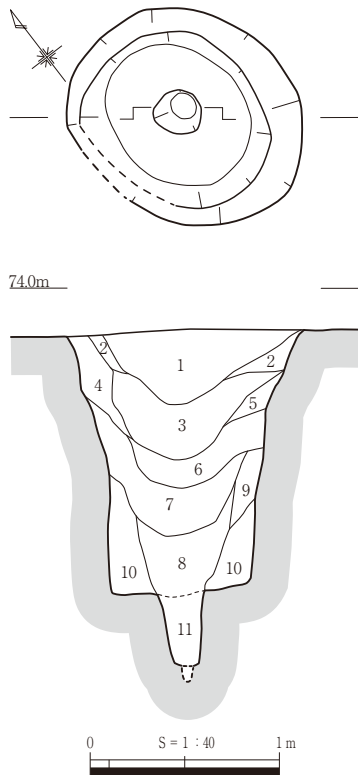
底面ピットは1基、底面のほぼ中央に確認した。平面形は歪な円形で、規模は径0.19~0.22m、底面からの深さは0.4mである。明瞭な杭痕跡は確認できなかった。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK21(第56・57図、PL.25・42)

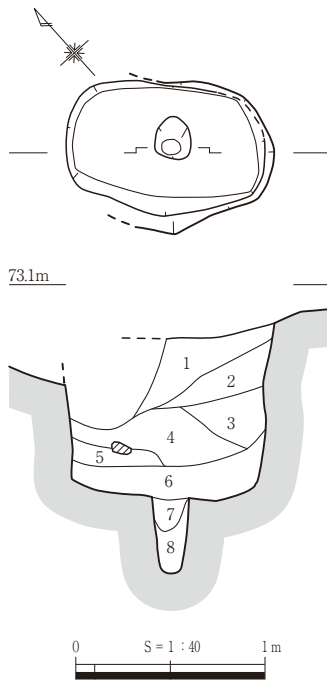
K 4グリッド、標高73.1mの平坦地、丘陵尾根部に位置する。検出層位はVII層である。

平面形は楕円形で、開口部は遺存していない。規模は、遺構上面で長軸0.98m、短軸0.81m、底面



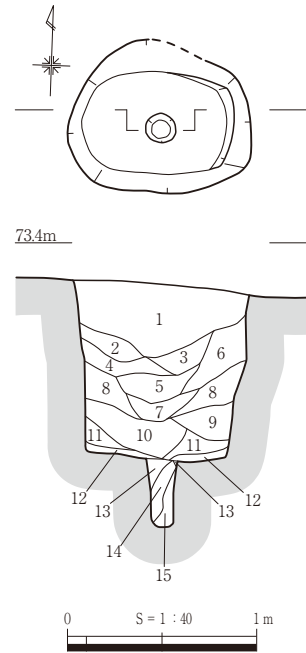
1. 黒褐色土 (10YR2/3)
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 径2mm以下の地山粒含。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 径5mm以下のAT粒僅少含。
4. 褐色土 (10YR4/4) 径2cm以下のATブロック多含。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径3mm以下の地山粒多含。
6. 黒褐色土 (10YR3/2)
7. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや強。
8. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。粘性やや強。
9. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径5mm以下の地山粒少含。
10. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。粘性やや強。径1cm以下のAT粒少含。
11. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱。

第54図 SK19



1. 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱。径5mm以下の炭化物少含。
2. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径2mm以下の地山粒僅少含。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。
4. 黒褐色土 (10YR3/1)
5. 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱。粘性やや強。径2mm以下の地山粒多含。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強。径5mm以下の地山粒多含。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱。粘性やや強。径5mm以下の地山粒多含。
8. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱。粘性やや強。径2mm以下の地山粒含。

第55図 SK20



1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径5mm以下の地山粒僅少含。縄文土器(晩期)含。
2. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径2cm程度のATブロック少含。
3. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱。径2cm程度のATブロック少含。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱。径2mm以下の地山粒少含。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱。径5mm以下の地山粒少含。
6. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱。径2mm以下の地山粒少含。
7. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり弱。径2cm以下の地山ブロック含。
8. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。
10. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒少含。土器片含。
11. 黒色土 (10YR2/1)
12. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強。
13. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径5mm以下の地山粒含。攪乱の可能性あり。
14. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり弱。径3mm以下の地山粒含。
15. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱。

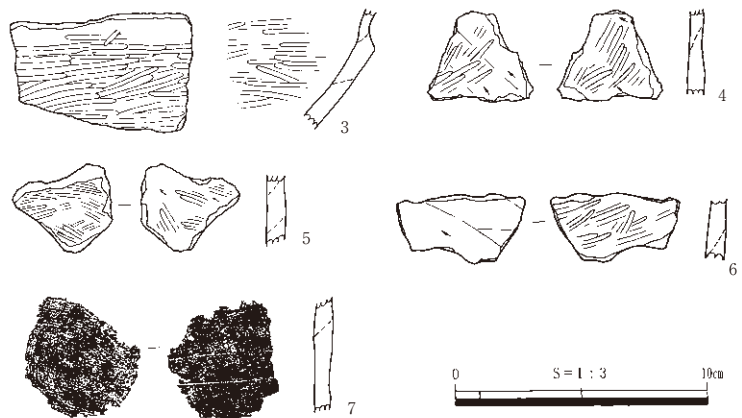
第56図 SK21

では長軸0.77m、短軸0.54m、検出面からの深さは0.93mである。

埋土の色調は黒褐色が主体となり、Ⅲ層由来の堆積と考える。

底面ピットは、1基を確認した。底面中央に穿たれ、平面形は円形である。規模は径0.16m、底面からの深さは0.37mを測る。明瞭な杭痕跡は確認されなかった。

出土遺物は土器があり、埋土上層(1層)から断片的な資料ながら出土した(第57図3~7)。3は浅鉢の体部片で、屈曲部を有する。内外面ミガキが施され、晩期帰属と想定する。4~6は磨耗のため不明瞭な箇所もあるが、内外面ナデ



第57図 SK21出土遺物

第3章 調査の成果

後ミガキが為される資料で、後晩期帰属と考える。7も後晩期帰属が想定される粗製土器の深鉢片か。内外面に粗雑なナデを施す。

底面ピット埋土(13~15層)中から抽出された炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、較正年代で1253~1119calBC、縄文時代晩期前葉頃に相当する結果を得た。本遺構の場合、埋土上層出土土器の年代観に対し大きな齟齬は認められない。

本遺構は形態及び埋土の特徴、分析結果から縄文時代の落とし穴と考える。

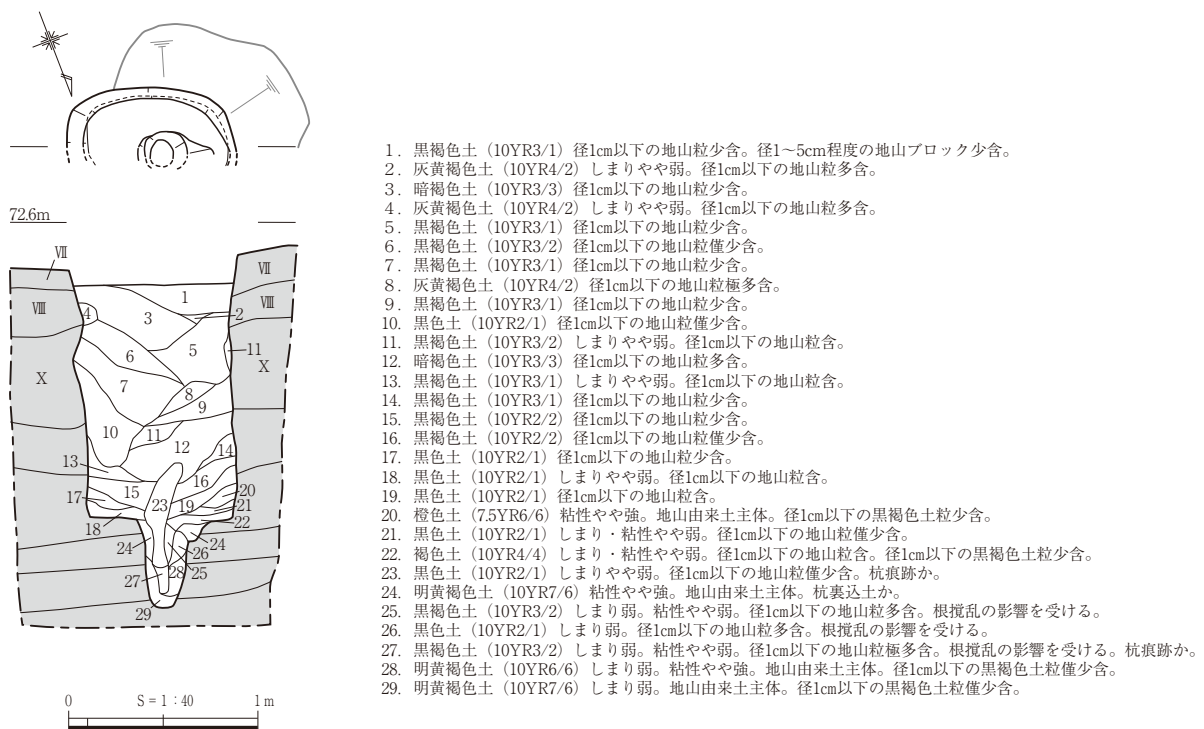
SK22(第58図、PL.26)

K3グリッド、標高72.5mの平坦地に位置する。ただ、東側至近は谷地形となっており、概ね傾斜変換点に立地する。検出層位はⅦ層である。Ⅲ層直下にすぐⅦ層が露出し、Ⅴ層の堆積はほとんど認められない状況である。

本遺構では、埋土の堆積状況を詳細に観察するため箱掘りを実施した。平面形は遺存範囲から楕円形と認識できる。開口部は残存していない。規模は、遺構上面で長軸0.90m、短軸は不明、底面では長軸0.73m、短軸は不明、検出面からの深さは1.43mである。

埋土色調は黒褐色、黒色を主体とし、Ⅲ層由来の堆積である。基盤層由来土が主体となる堆積はわずかである。

底面ピットは、底面ほぼ中央に1基を確認した。SK18と同様、埋土中における杭痕跡の把握を主眼とし、遺構検出面に対し垂直方向に埋土を少しずつ掘り進め、土層観察を随時行った。その結果、底面ピット内から埋土中へ延びる堆積(23層)を確認した。ピット内の27層と併せ、杭痕跡の可能性が考えられる。杭痕跡とした場合、杭の径は6~8cm程度に復元できる。底面ピット内において、23層の周囲には、基盤層を主体とする堆積(24・28・29層)が認められる。特に24層は基盤層との識別が困



第58図 SK22

難なほど類似するが、僅かに黒褐色土を粒状に包含し、断面観察では埋土と評価できる。土坑底面に杭に比して大きめの坑を掘り、杭材を埋設する状況が窺える。ピットの平面形は不整形で、長軸は24層を含めると0.4m程度となり、短軸は不明、底面からの深さは0.47mである。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK23(第59図、PL.26・27)

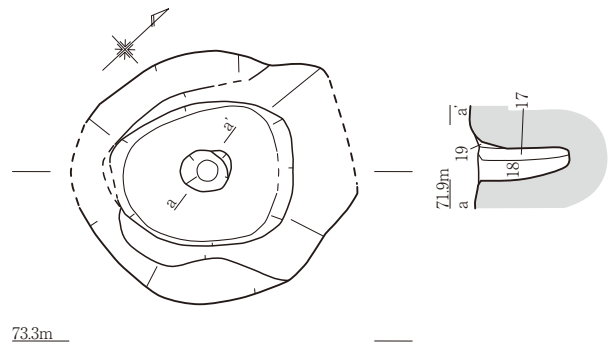
K2・3グリッド、標高71.7mの斜面地に位置する。調査地内を南北方向へ延びる尾根部東側の谷地形へと降る箇所該当する。検出した層位はⅦ層である。後世の攪乱により、掘方上部を大きく失っている。

平面形は楕円形で、開口部は遺存しない。規模は、遺構上面で長軸0.89m、短軸0.68m、底面では長軸0.79m、短軸0.55m、検出面からの深さは0.45mである。

埋土の色調は黒色、黒褐色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。

底面ピットは、1基を土坑底面のほぼ中央で確認した。平面形は円形で、規模は径0.17m、底面からの深さは0.27mを測る。明瞭な杭痕跡は認められない。

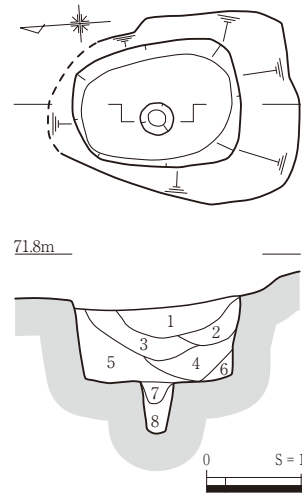
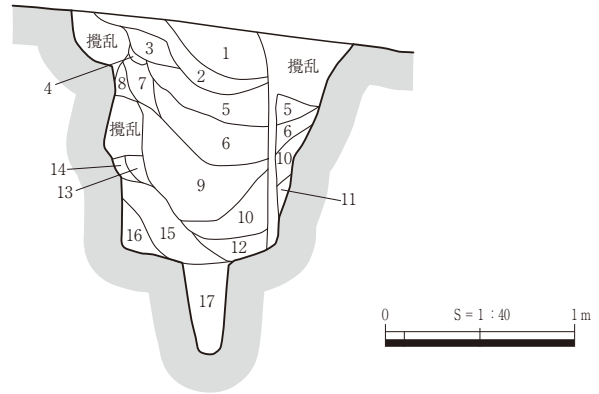
本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。



SK24(第60図、PL.27・28)

L6グリッド、標高73.0mの平坦地に位置する。丘陵尾根部とその東側の谷地形との傾斜変換点近くとなる。Ⅶ層において検出した遺構である。

平面形は楕円形である。掘方上位に段状となる箇所が確認できることから、開口部は僅かに遺存



1. 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱。径1~2cm程度の地山ブロック多含。根攪乱の影響を受ける。
2. 黒色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒極多含。根攪乱の影響を受ける。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒少含。根攪乱の影響を受ける。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり・粘性やや弱。径1cm以下の地山粒少含。根攪乱の影響を受ける。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性やや弱。径1cm以下の地山粒少含。根攪乱の影響を受ける。
6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり・粘性やや弱。径1cm以下の地山粒多含。根攪乱の影響を受ける。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱。径1~3cm程度の地山ブロック多含。
8. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり・粘性弱。径1cm以下の地山粒少含。攪乱の影響を受ける。

1. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 径1cm以下の地山粒・炭化物含。
2. 灰黄褐色土 (10YR5/2) 径1cm以下の地山粒・炭化物含。
3. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1~3cm程度の地山ブロック含。
4. 灰黄褐色土 (10YR5/2) しまり弱。径1cm以下の地山粒多含。
5. 灰黄褐色土 (10YR5/2) 径1cm以下の地山粒・炭化物多含。
6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒含。炭化物少含。
7. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒多含。炭化物含。
8. 灰黄褐色土 (10YR5/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
9. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1~5cm程度の灰黄褐色土ブロック含。径1cm以下の地山粒僅少含。
10. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒少含。
11. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
12. にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性やや強。地山由来の土主体。径1cm以下の黒褐色土粒少含。
13. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒含。
14. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱。径1cm以下の地山粒多含。
15. 黒褐色粒 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒少含。径1~3cmの灰黄褐色土ブロック少含。
16. 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性やや強。径1cm以下の地山粒多含。
17. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性弱。径1cm以下の地山粒少含。杭痕跡。
18. 明黄褐色土 (10YR7/6) しまりやや弱。径1cm以下の黒褐色土粒少含。
19. 明黄褐色土 (10YR7/6) しまり弱。径1cm以下の黒褐色土粒少含。

第59図 SK23

第60図 SK24

第3章 調査の成果

するとみられる。ただ、当該個所は樹木根の攪乱を受けており、全周しない。規模は、遺構上面で長軸1.46m、短軸1.35m、底面では長軸0.82m、短軸0.70m、検出面からの深さは1.27mを測る。

埋土の色調は、灰黄褐色、黒褐色が主体となる。灰黄褐色系は上層から中層にかけて目立ち、基盤層由来土を粒状に多く含む堆積も認められるが(4・5層)、根攪乱の影響も大きく、いずれもⅢ層由来と考える。

底面ほぼ中央で、ピットを1基検出した。平面形は円形で、規模は径0.22~0.27m、底面からの深さは0.48mである。埋土の断面観察の結果、杭痕跡の可能性のある堆積(17層)を確認した。杭痕跡とした場合、杭の径は7cm程度となる。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK25(第61図、PL.28・29)

L3グリッド、標高71.4mの斜面地に位置する。丘陵尾根部から東側の谷地形へと降る箇所に該当する。土坑を2基、重複した状況で検出した。検出層位はⅦ層である。断面観察による検討から、先に営まれた方をSK25、後に掘削された方SK31は形態的特徴から弥生時代の貯蔵穴と判断した。

平面形は、幅が狭く細長い長方形で、本遺跡検出の土坑中では特異な形態を示す。掘方上部のほとんどを後出のSK31掘方により掘削される。遺存する規模は、遺構上面で長軸1.15m、短軸0.51m、底面では長軸0.83m、短軸0.25m、検出面からの深さは1.26mである。

埋土の色調は黒褐色を主体とする。最下層付近には、基盤層由来土が多く混じる傾向にあるが、全般に見てⅢ層由来の堆積が主体と把握できる。

底面ほぼ中央にピットを1基確認した。いわゆる底面ピットと考えられる。平面形は円形で、規模は径0.20~0.22m、底面からの深さは0.30mである。杭痕跡の可能性をもつ堆積(32層)があり、そこ

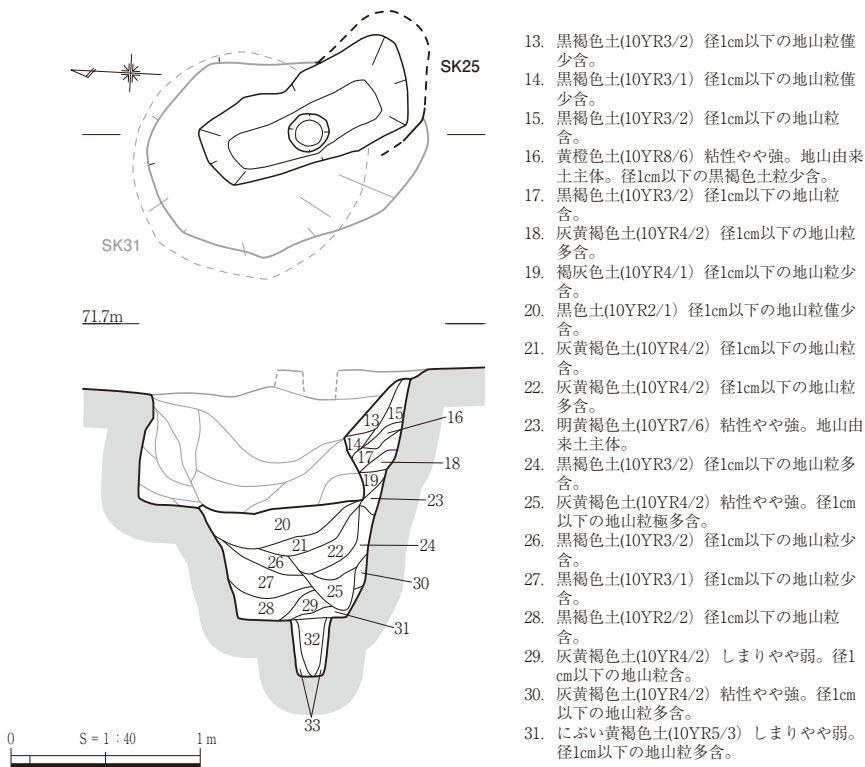
から計算すると杭の径は12cm前後と想定される。

本遺構から遺物は出土していないが、底面ピット埋土から微細な炭化物を抽出できたため、それを試料として放射性炭素年代測定を実施した。その結果、校正年代で1666~1536calBC、縄文時代後期中葉頃に相当する数値を得た。

本遺構は形態的特徴や埋土、分析結果などを総合すると、縄文時代の落とし穴と判断できる。

SK26(第62図、PL.29~31)

M7・N7グリッド、71.0



13. 黒褐色土(10YR3/2) 径1cm以下の地山粒僅少含。
14. 黒褐色土(10YR3/1) 径1cm以下の地山粒僅少含。
15. 黒褐色土(10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。
16. 黄褐色土(10YR8/6) 粘性やや強。地山由来土主体。径1cm以下の黒褐色土粒少含。
17. 黒褐色土(10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2) 径1cm以下の地山粒多含。
19. 褐色土(10YR4/1) 径1cm以下の地山粒少含。
20. 黒色土(10YR2/1) 径1cm以下の地山粒僅少含。
21. 灰黄褐色土(10YR4/2) 径1cm以下の地山粒含。
22. 灰黄褐色土(10YR4/2) 径1cm以下の地山粒多含。
23. 明黄褐色土(10YR7/6) 粘性やや強。地山由来土主体。
24. 黒褐色土(10YR3/2) 径1cm以下の地山粒多含。
25. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性やや強。径1cm以下の地山粒極多含。
26. 黒褐色土(10YR3/2) 径1cm以下の地山粒少含。
27. 黒褐色土(10YR3/1) 径1cm以下の地山粒少含。
28. 黒褐色土(10YR2/2) 径1cm以下の地山粒含。
29. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒含。
30. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性やや強。径1cm以下の地山粒多含。
31. におい黄褐色土(10YR5/3) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。

第61図 SK25

～71.3mの斜面地に位置する。丘陵尾根部の東側斜面に該当し、VII層において検出した土坑である。

平面形は不整な楕円形である。明瞭な開口部は残存していない。規模は、遺構上面で長軸1.12m、短軸0.86m、底面では長軸0.67m、短軸0.32m、検出面からの深さは1.26mを測る。

埋土は黒色・黒褐色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。ただ、下層において基盤層由来土を主体とする堆積を確認し、埋土のあり方の変化が認められたため(PL.31-2)、堆積を詳細に観察するため箱掘りを行った。結果、概ね深さ30cmに亘り基盤層由来土を主体とした堆積が認められ、これらは人為的な所作による可能性もある。当該個所は比較的細かい単位に分層でき、全般的に中央が下方へ凹むレンズ状を呈していることから、自然埋没の可能性も考えられるが、判然とししない。

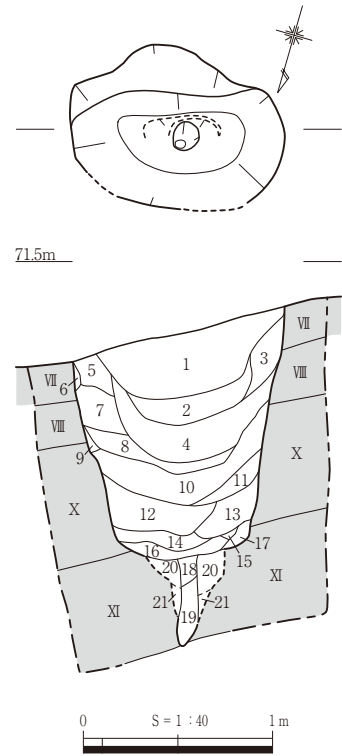
底面ピットは1基、底面ほぼ中央に確認した。埋土の18・19層は、基盤層由来土をブロック状に多く包含する。その周囲に基盤層と酷似する堆積(20・21層)を確認した。色調は至近の基盤層とほとんど差異はないが僅かに締りが弱く、判別したものである。20・21層は杭を据えるための掘方埋土と捉えられ、18・19層は杭痕跡の可能性が考えられる。これらを杭痕跡とした場合、杭材の径は8～10cm程度に復元できる。ピットの平面形は箱掘りで失われたためはっきりしないが、長軸0.4m程度の不整な楕円形を呈するものと想定する。底面からの深さは0.47mである。土坑埋土中に杭痕跡が延びていないか断面を詳細に観察したが、確認できなかった。

本遺構からは遺物は出土していないが、形態及び埋土の特徴から縄文時代の落とし穴と考える。

SK27(第63図、PL.32・33・42)

K4グリッド中央、丘陵頂部から東側の谷に向かう傾斜変換点付近に位置する。IV層において当初は礫の集中箇所として検出した。

掘り込みの平面形は楕円形であり、長軸1.51m、短軸1.07mを測る。皿状の断面形を呈し、底面までの深さは最大で0.36mを測る。遺構中からは多量の礫が検出された。礫の中には長軸5cmに満たない小さなものもあるが、長軸10～20cm程のものが主体をなす。その礫集中箇所の最下部には、比較的大型の礫を配置している。これは、長軸40cm、厚さ5cmほどの平坦で大きな礫を中心としたものである。これら最下部の礫群は、中央に平坦面を持つ板状の石を設置し、その周辺に礫を弧状に配する状況が窺える(拡大図B)。このような状況から最下部の礫群は原位置性が高いと考える。それ以外の礫も、



1. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒僅少含。
2. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒僅少含。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。3cm程度の地山ブロック含。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下の地山粒少含。
5. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒多含。
6. 明黄褐色土 (10YR7/6) しまりやや弱。径1cm以下の黒褐色土粒僅少含。地山由来土主体。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。
8. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒僅少含。
9. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
10. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒含。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒含。
12. にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性やや強。径1cm以下の黒褐色土粒含。X層由来土主体。
13. 橙色土 (7.5YR7/6) 粘性強。径1cm以下の黒褐色土粒少含。X層由来土主体。
14. 浅黄褐色土 (7.5YR8/6) しまりやや弱。粘性強。径1cm以下の黒褐色土粒僅少含。Ⅲ層由来土主体。
15. 橙色土 (7.5YR7/6) しまりやや弱。粘性強。径1cm以下の黒褐色土粒少含。X層由来土主体。
16. 灰黄褐色土 (10YR5/2) しまりやや弱。粘性強。径1cm以下の地山ブロック多含。
17. 橙色土 (7.5YR7/6) 粘性やや強。
18. 橙色土 (7.5YR7/6) しまりやや弱。径1cm以下の黒褐色土粒僅少含。X層由来土主体。
19. 橙色土 (7.5YR7/6) しまり弱。粘性やや弱。径1cm以下の黒褐色土粒極多含。X層由来土主体。
20. 明黄褐色土 (10YR7/6) XI層由来土主体。底面ピット掘方の可能性あり。地山と比べややしまり弱、掘った直後に埋めたか。
21. 明黄褐色土 (10YR7/6) しまりやや弱。XI層由来土主体。底面ピット掘方の可能性あり。地山と比べややしまり弱、掘った直後に埋めたか。

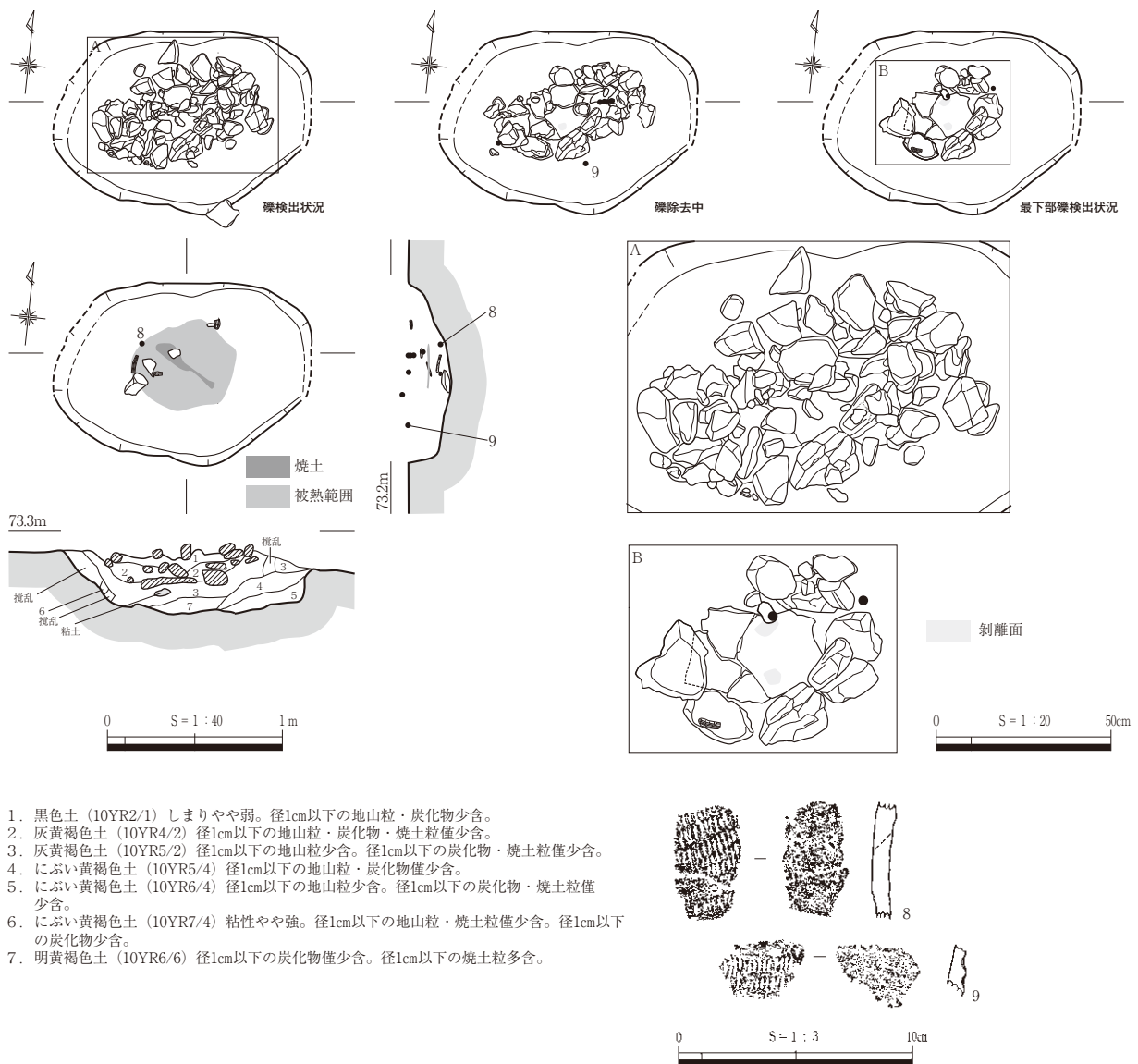
第62図 SK26

第3章 調査の成果

楕円形の平面をなすように検出されており、遺構機能時の位置からは遊離しているものの、最下部の礫と同様、本来組み合って配置したことが想定できる。このような礫の平面的な検出状況を踏まえると、遺構機能時にはこれらの礫群が、中央が凹む鉢状に配置されていたことも考えられる。礫群には、表面が熱によって剝落しているものや割れているもの、赤化しているものもあり、遺構使用時の状況をよく示している。すなわち、当遺構は礫を敷き詰めた状態で火を用いたものとする。

埋土は7層に分層され、上層の1層が黒色土のほかは、褐色系の土を主体とする。これら7層の埋土にも焼土や炭化物が含まれ本遺構で火が用いられたことが窺える。さらに、3層上面に被熱の痕跡および焼土の集中が面として確認できる。このような被熱面や最下部の礫群よりも下位の堆積(3～7層)は、熱で変質した地山の可能性も考えたが、焼土や炭化物を包含していたため、遺構埋土と捉えた。礫上面において遺構の機能があったことは明らかであるため、これら下位の堆積は遺構の下部構造の可能性を考える。

遺物は埋土上層を中心に縄文土器片が出土している。図示した2点は、同一個体の可能性があり、



第63図 SK27及び出土遺物

やや直線的な形態の爪形文が施文されていることから、縄文前期初頭(羽島下層 I 式併行)に位置づけられる可能性をもつ資料である。

土坑床面付近から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、較正年代で9211～8925cal BCとの結果が得られている。これは縄文時代早期前葉頃に相当し、出土した土器の年代とは開きがある。木の根の攪乱などによって原位置性が低いと考えられる礫が上層に多く含まれていることを含め、土器は後世の混入による可能性がある。また、特徴が類似する遺構であるSK28の放射性炭素年代測定結果が、本遺構と同様縄文時代早期前葉であることも、本遺構の年代を放射性年代測定の結果に求めることを支持する。

以上のことから、本遺構の性格については、火を用いた炉の様な機能が想定される。調理等に関わるものである可能性が指摘出来よう。

SK28(第64図、PL.33・34)

L5グリッド北東、丘陵頂部から谷に向かう傾斜変換付近に位置する。IV層で礫の集中箇所として検出した。

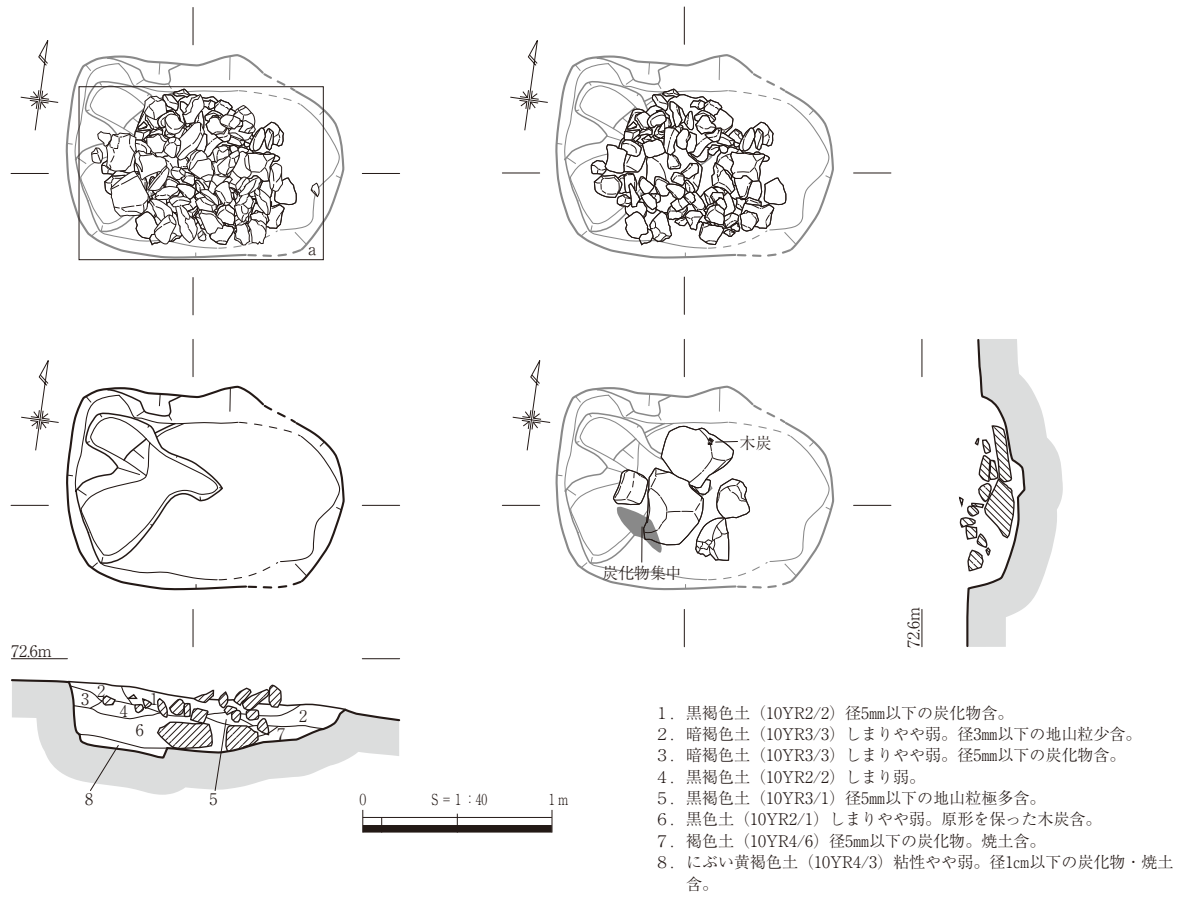
隅丸長方形の平面形を呈し、長軸1.46m、短軸1.05mを測る。遺構の西壁が垂直に近いほかは、皿状の断面形を呈し、底面までの深さは最大で0.28mを測る。底面は北西側が段状に高くなっており、さらにこの部分で焼土の落ち込みが認められる。被熱した地山の可能性も考えられたが、焼土粒や炭化物を含むため、遺構の埋土と判断した。この落ち込みは不整形で深さは4cm程度のものである。

礫群は楕円形を呈する平面的位置関係をもって検出された。底面直上では、長軸40cm程の大型で平坦な面をもつ礫2つが組み合うような状況で検出されている。この2つの礫は長軸10～20cmの礫が主体である本遺構において、突出した大きさの礫である。周辺にある最下層の礫も含め、原位置性が高いものとする。これは、先述のSK29と共通したあり方であり、遺構の性格の共通性を示している。遺構中に木の根が入り込んでいたこともあり、埋土中層や上層を中心とする他の礫には原位置性が低いものも多いと考える。しかし、礫群の平面的なまとまりから、二次的な移動は大きくないと推察する。SK27の礫群の下部構造(第63図拡大部分B)から考えれば、弧状に礫を配し、中央が凹む鉢状に組んであった可能性もあるが、現状でははっきりしない。礫の中には、赤変しているものが多く、火の使用がなされていたことが窺える。

埋土は焼土の落ち込みも含めて8層に分けられる。底面付近に褐色系の埋土が堆積しており、それより上には黒色系や暗褐色の埋土が大小の礫を含みながら堆積していることが看取される。埋土には炭化物を含む層が多く、特に床面直上の平坦な礫面上には炭化物の集中も認められた。したがって、火を用いた行為は、この平坦な礫上面を中心になされていたと考えられる。さらに、それより下位の堆積(6～8層)は遺構の下部構造の可能性が想定される。これらの層には殆ど礫が含まれないことから、平坦な礫を据えたのち、その上面を機能面にするために埋め戻されたものとする。

遺構最下部である焼土の落ち込みから採取した炭化物の放射性炭素年代測定では較正年代で9119～8801cal BCとの結果が得られている。SK27と同様、これは縄文時代早期前葉頃に相当する。なお、土器等の遺物は出土していない。

SK27との形態、特徴の共通性、放射炭素年代測定結果が概ね一致することなどから、本遺構もまた縄文時代早期前葉の帰属が想定され、火を用いた炉の様な機能が想定される。



第64図 SK28